

11月11日（金）

おはようございます。

今日は渡辺和子さんの話を致します。渡辺和子さんとはどういう人かというと、カトリックのシスターです。年齢は学園長より二つ上の1927年生まれで2016年に89歳で亡くなりました。

彼女は数奇な運命の方です。お父さんが渡辺錠太郎さんといって、日本の陸軍大将で教育総監だった人です。そのお父さんが、二・二六事件で青年将校に銃撃されて亡くなったのだけれども、その現場（自宅の居間）に当時九歳の彼女はいたのです。お父さんは娘に危害を加えられないように場所から離れるように指示した。彼女は助かりましたが、お父さんが銃弾に倒れるところを目の当たりにしたのだという。

そういうことがきっかけだったのかは分かりませんが、18歳でキリスト教の洗礼を受け、29歳でナミュール・ノートルダム修道女会に入会しています。35歳で岡山県のノートルダム清心女子大学の教授に就任しました。就任した直後にそこの一番偉い神父さんが亡くなってしまい、彼女が36歳の若さでノートルダム清心女子大学の三代目の学長をしなくてはならなくなるのです。初代の学長も二代目の学長もアメリカ人の神父さんで、70代後半までいらした。学識があって博学で権威もある人でした。彼女は同大学を卒業したわけでもないのに初の日本人学長をしなくてはならなくなったわけで、ノイローゼみたいになったというのです。従来神父さんのように権威があるわけでもないで周りの反発があり、挨拶もろくにしてもらえない、ねぎらいの言葉もまったくない状態の中で、修道院をやめようかというくらいになった。

そういうときに、先輩の修道の方からお手紙というか詩をいただいた。その詩に、「置かれた場所で咲きなさい」と書いてあった。それは、彼女にとって、人生のひとことだったという。「置かれた場所で咲きなさい」とは、その場所に仕方がないのでお祈りしようという意味ではありません。神が、自らをその場所に預けてくれた。だから、神のその判断が間違っていないことを自分が証明しなくてはならない。そのためには与えられた環境で、ベストを尽くして周りの人を幸せにきなさいという意味だった。

この詩の言葉は今の自分にぴったりと合った言葉だと思ったという。これまでの自分は、周りが自分のことを分かってくれないとか、挨拶もしてくれないとか、なにしてくれない、これしてくれないばかりの、「くれない」族だったなと思い、くれない族をもう卒業しようと思った。

与えられたこの場所で、ベストを尽くすということ、置かれた場所で精一杯努めて周りの人を幸せにしようと考えようになった。

こういう話を聞いていて、清風では深般若波羅蜜多を行ずるということについて、確信に触れるまで努力すると教えていますが、それは、調子のいいときには努力をするということではなくて、どんな状況においても、与えられた環境の中でベストを尽くしていくということかなというふうに身に染みしました。

「置かれた場所で咲きなさい」とは、与えられた環境でベストを尽くしなさいということです。そこで自分が幸せになれることを覚えたら、いかなる環境においても自分を上手に幸せにしていくことができるし、周りの人も幸せにしていけることができる。

「あれがない」「これがない」ということばかり言っているようでは、どの環境におかれても同じ事を繰り返すだけです。置かれた場所で咲くとは、深般若波羅蜜多を行ずるということにも通ずることだと思います。諸君にもいろいろ不満もあるでしょうが、まずは置かれた場所でベストを尽くして、自分も周りも幸せに変えていける人になってもらいたいと思います。

自分にも思い当たるところがあったら、自分の生活の中で生かしてもらいたいと思います。今朝の話はこれで終わります。

学校長